

【資料4】

第2次歯と口腔保健計画中間評価報告書案

令和4年3月

あま市

I アンケート調査結果

1. 調査の概要

(1) 調査の目的

平成 29 年度から令和 8 年度を計画期間とする「第 2 次あま市健康づくり計画・歯と口腔保健計画・食育推進計画」の中間評価として、計画で設定した目標の達成状況や市民の健康に関する意識及び健康づくりの状況を把握するため、本調査を実施しました。

(2) 調査の概要

| | |
|-------|-------------------------------|
| 調査対象者 | 市内在住の 20 歳以上 84 歳以下の住民 |
| 抽出方法 | 無作為抽出 |
| 調査方法 | 郵送配布・郵送回収 |
| 調査期間 | 令和 3 年 7 月 2 日（金）～7 月 26 日（月） |
| 配布数 | 3,000 件 |
| 有効回収率 | 38.8%（回収件数：1,164 件） |

(3) 結果の見方

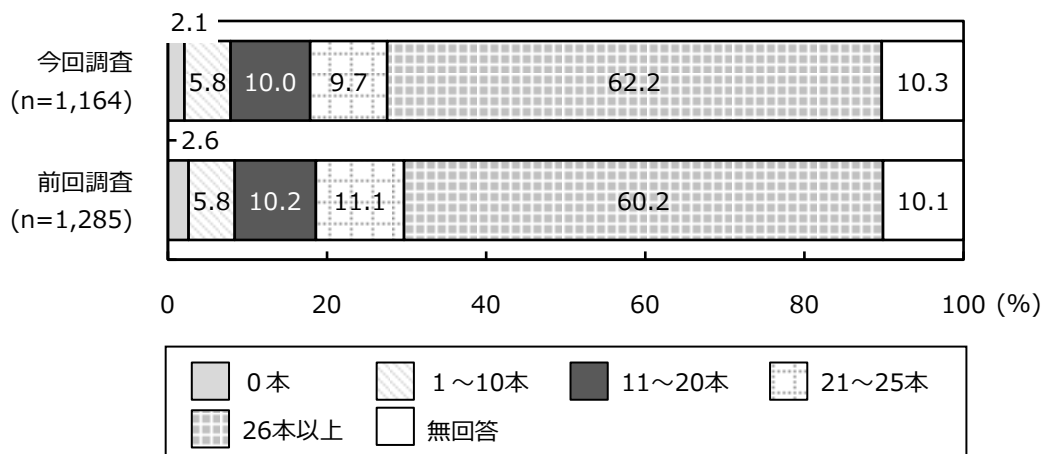
- 図表中の「n（number of case）」は、集計対象者数を表しています。
- 回答結果の割合「%」は有効サンプル数に対して、それぞれの回答数の割合を小数点以下第 2 位で四捨五入したものです。そのため、単数回答（複数の選択肢から 1 つの選択肢を選ぶ方式）であっても合計値が 100.0%にならない場合があります。
- 図表中の「無回答」とは、回答が示されていない、または回答の判別が困難なものです。
- クロス集計表の網掛けについては以下の通りです（その他、無回答を除く順）。
最も割合の高いもの：網掛けと白抜き文字
2 番目に割合が高いもの：網掛け（1 位が同率の場合は 2 番目の網掛けはなし）

2. 調査結果

歯と口腔の健康について

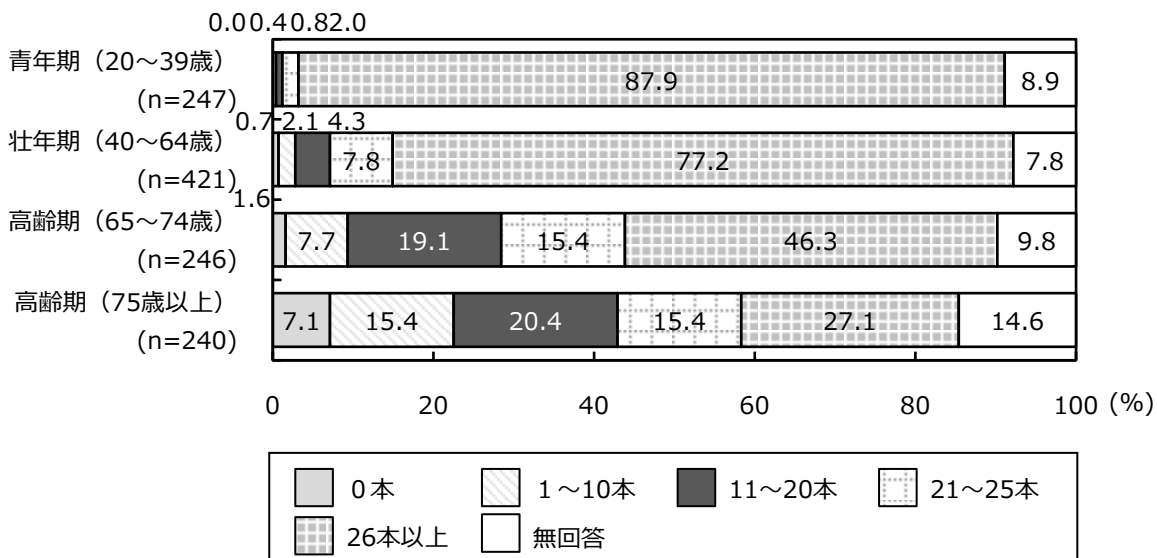
問 1 現在、あなたの歯は何本ありますか。【数字記入】

「26本以上」が62.2%と最も高く、次いで、「11～20本」が10.0%となっています。
 「26本以上」の割合は前回調査より2.0ポイント増加しています（前回：60.2%）。



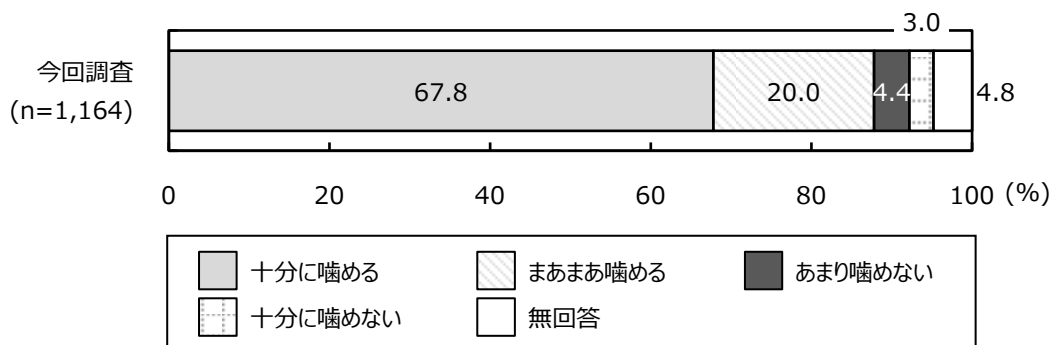
【クロス集計(ライフステージ別)】

「26本以上」の割合をライフステージ別でみると、《青年期（20～39歳）》で最も高く、87.9%となっています。最も割合が低いのは《高齢期（75歳以上）》で27.1%となっています。また、「26本以上」の割合は世代が上がるごとに大きく減少する傾向にあります。



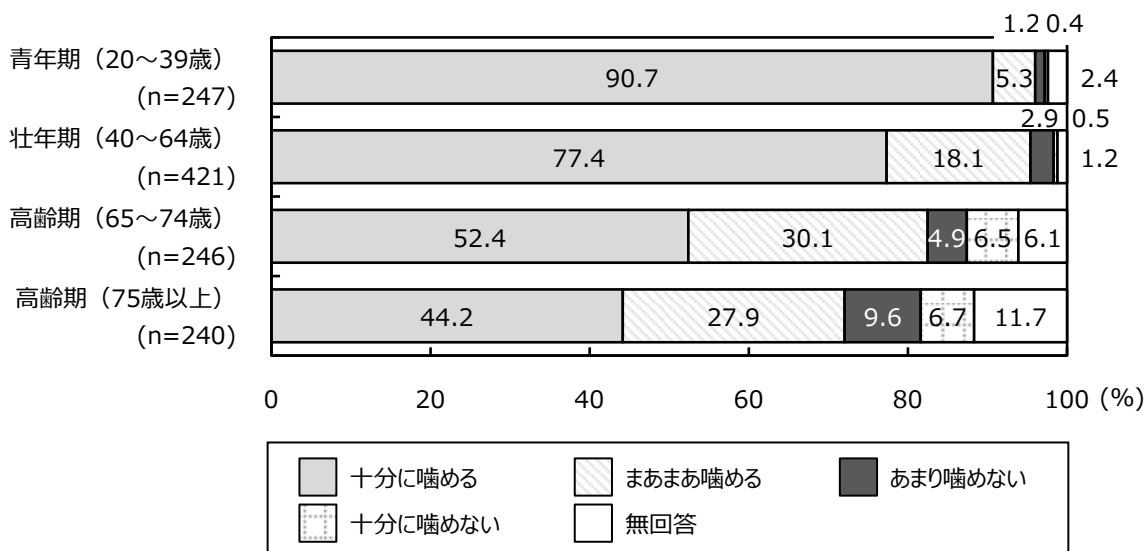
問 2 今回の歯で噛んで食べることができますか。【単数回答】

「十分に噛める」が 67.8%と最も高く、次いで、「まあまあ噛める」が 20.0%、「あまり噛めない」が 4.4%となっています。『噛める』（「十分に噛める」+「まあまあ噛める」）の割合については 87.8%となっています。



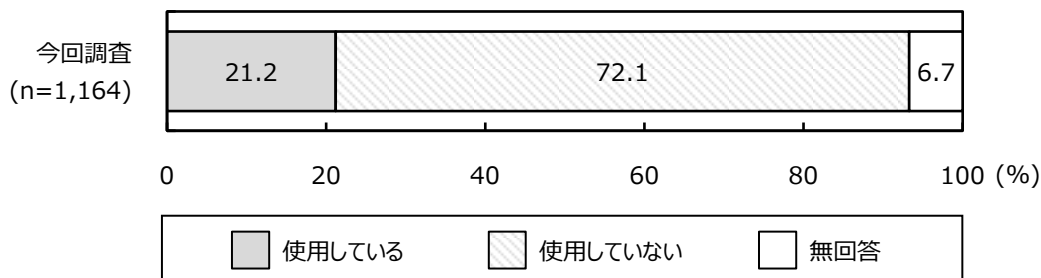
【クロス集計(ライフステージ別)】

「十分に噛める」の割合をライフステージ別で見ると、世代が上がるほど低くなる傾向にあり、《青年期（20～39歳）》では 90.7%であるのに対し、《高齢期（75歳以上）》では 44.2%となっています。



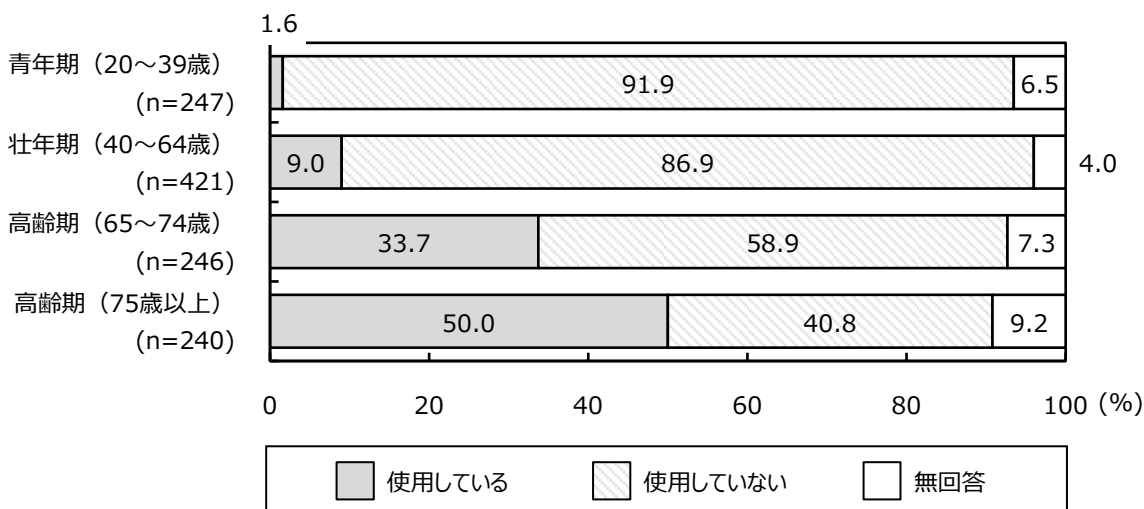
問3 入れ歯を使用していますか。【単数回答】

「使用している」が 21.2%、「使用していない」が 72.1%となっています。



【クロス集計(ライフステージ別)】

「使用している」の割合をライフステージ別でみると、《高齢期（75歳以上）》で最も高く、50.0%となっています。最も割合が低いのは《青年期（20～39歳）》で 1.6%となっています。

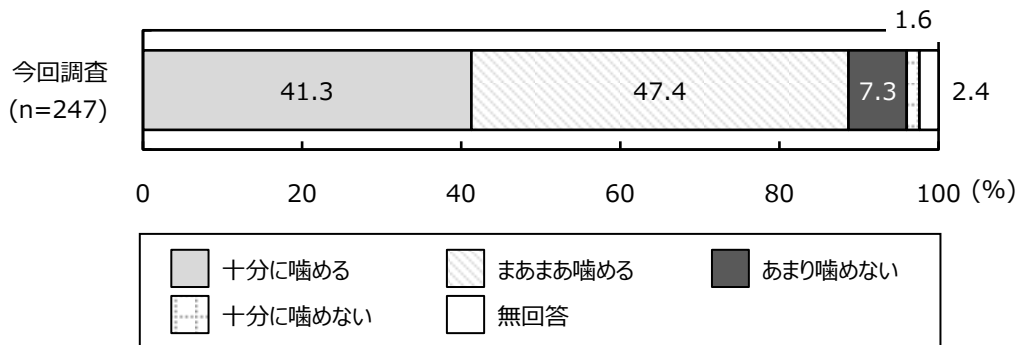


問 3 で「使用している」と回答した人のみ

問 3-1 今の入れ歯で噛んで食べることができますか。【単数回答】

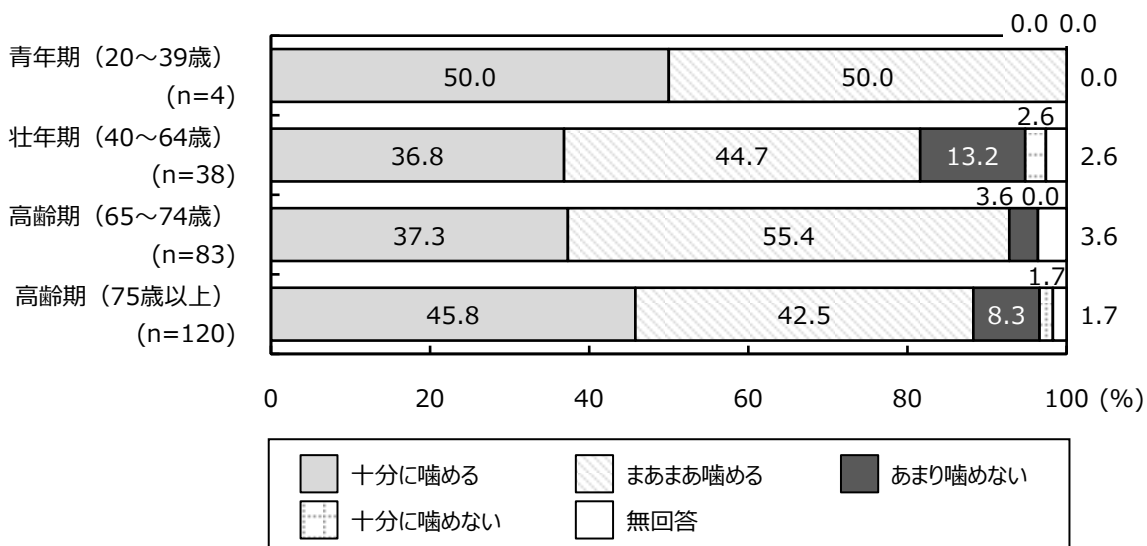
「まあまあ噛める」が 47.4%と最も高く、次いで、「十分に噛める」が 41.3%、「あまり噛めない」が 7.3%となっています。

『噛める』（「十分に噛める」+「まあまあ噛める」）の割合については 88.7%となっています。



【クロス集計(ライフステージ別)】

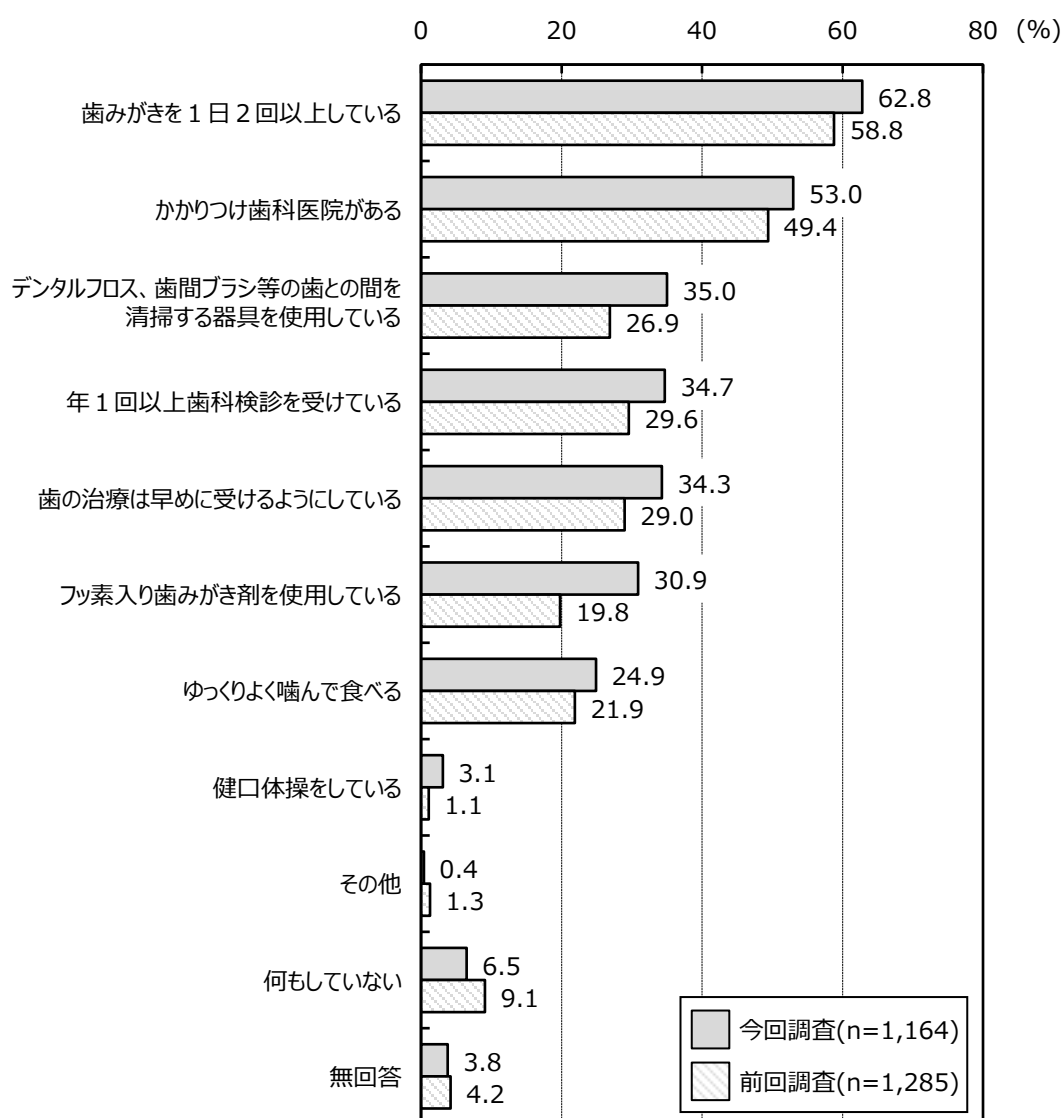
『噛める』の割合をライフステージ別で見ると、「青年期（20～39歳）」で最も高く、100.0%となっています。最も割合が低いのは「壮年期（40～64歳）」で 81.5%となっています。



問4 ご自分の歯と口腔の健康管理として、どのようなことを実践していますか。【複数回答】

前回調査と同様に「歯みがきを1日2回以上している」が最も高く、62.8%となっています。次いで、「かかりつけ歯科医院がある」が53.0%、「デンタルフロス、歯間ブラシ等の歯との間を清掃する器具を使用している」が35.0%、「年1回以上歯科検診を受けている」が34.7%、「歯の治療は早めに受けるようにしている」が34.3%となっています。

「歯みがきを1日2回以上している」、「かかりつけ歯科医院がある」、「デンタルフロス、歯間ブラシ等の歯との間を清掃する器具を使用している」、「年1回以上歯科検診を受けている」、「歯の治療は早めに受けるようにしている」とも前回調査より増加しており、それぞれ4.0ポイント、3.6ポイント、8.1ポイント、5.1ポイント、5.3ポイントの増加となっています（前回：順に58.8%、49.4%、26.9%、29.6%、29.0%）。



【クロス集計(ライフステージ別)】

ライフステージ別でみると、いずれの世代においても「歯みがきを1日2回以上している」、「かかりつけ歯科医院がある」が高い傾向にありますが、《青年期（20～39歳）》から《高齢期（65～74歳）》では「歯みがきを1日2回以上している」が最も高く、《高齢期（75歳以上）》では「かかりつけ歯科医院がある」が最も高くなっています。また、《青年期（20～39歳）》では「フッ素入り歯みがき剤を使用している」の割合も高くなっていますが、「フッ素入り歯みがき剤を使用している」の割合は世代が上がるほど低くなる傾向にあります。

(%)

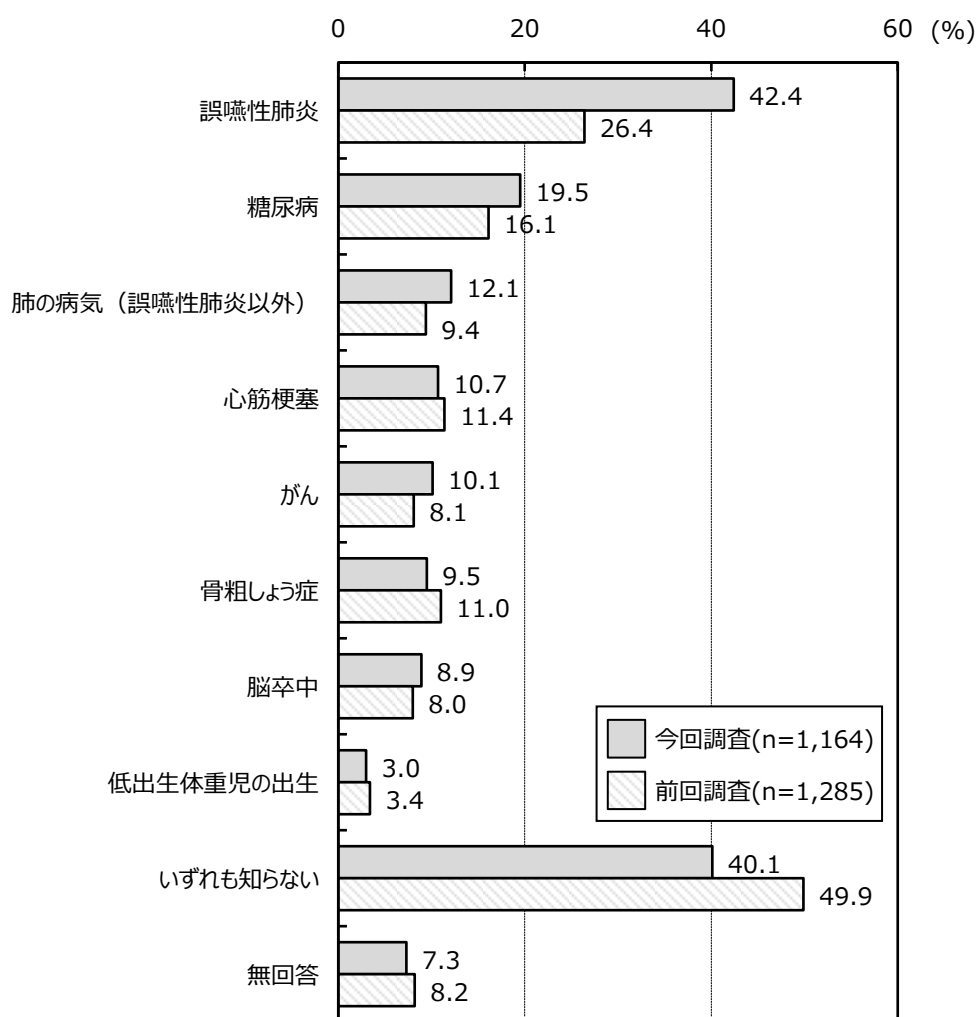
| | 歯みがきを1日2回以上している | フッ素入り歯みがき剤を使用している | かかりつけ歯科医院がある | デンタルフロス、歯間ブラシ等の歯との間を清掃する器具を使用している | 年1回以上歯科検診を受けている | ゆっくりよく噛んで食べる | 歯の治療は早めに行うようにしている | 健口体操をしている | その他 | 何もしていない | 無回答 |
|------------------------|-----------------|-------------------|--------------|-----------------------------------|-----------------|--------------|-------------------|-----------|-----|---------|-----|
| 青年期（20～39歳） (n=247) | 59.1 | 42.9 | 38.5 | 33.6 | 32.8 | 26.7 | 26.7 | 2.0 | 0.8 | 8.1 | 2.4 |
| 壮年期（40～64歳） (n=421) | 67.5 | 36.8 | 49.4 | 38.7 | 30.9 | 15.9 | 32.5 | 1.2 | 0.2 | 7.4 | 1.0 |
| 高齢期（65～74歳） (n=246) | 66.3 | 22.0 | 63.8 | 39.0 | 40.7 | 24.8 | 40.7 | 6.5 | 0.0 | 4.9 | 5.7 |
| 高齢期（75歳以上） (n=240) | 55.4 | 17.5 | 63.7 | 25.4 | 38.3 | 39.2 | 39.2 | 4.2 | 0.8 | 5.0 | 7.5 |

問 5 次の項目のうち、歯と口腔の健康と関連があることを知っているものを選んでください。

【複数回答】

前回調査では「いずれも知らない」が最も高かったのに対し、今回調査では「誤嚥性肺炎」が最も高く、42.4%となっています。次いで、「いずれも知らない」が40.1%、「糖尿病」が19.5%となっています。

「誤嚥性肺炎」、「糖尿病」については前回調査より増加しており、それぞれ16.0ポイント、3.4ポイントの増加となっています（前回：順に26.4%、16.1%）。「いずれも知らない」については前回調査より9.8ポイント減少しています（前回：49.9%）



【クロス集計(ライフステージ別)】

ライフステージ別でみると、《青年期（20～39歳）》では「いずれも知らない」が最も高く、《高齢期（65～74歳）》、《高齢期（75歳以上）》では「誤嚥性肺炎」が最も高くなっています。《壮年期（40～64歳）》については「誤嚥性肺炎」と「いずれも知らない」が同率で最も高くなっています。

(%)

| | 誤嚥性肺炎 | 糖尿病 | 肺の病気 (誤嚥性肺炎以外) | がん | 骨粗しょう症 | 低出生体重児の出生 | 心筋梗塞 | 脳卒中 | いずれも知らない | 無回答 |
|------------------------|-------|------|-------------------|------|--------|-----------|------|------|----------|------|
| 青年期（20～39歳） (n=247) | 28.3 | 14.2 | 10.5 | 9.7 | 8.9 | 8.5 | 7.3 | 6.5 | 53.4 | 6.5 |
| 壮年期（40～64歳） (n=421) | 42.5 | 23.0 | 10.9 | 11.9 | 8.3 | 1.9 | 13.3 | 11.2 | 42.5 | 3.1 |
| 高齢期（65～74歳） (n=246) | 52.4 | 22.4 | 14.2 | 10.2 | 11.0 | 1.6 | 11.8 | 12.6 | 33.3 | 6.5 |
| 高齢期（75歳以上） (n=240) | 46.7 | 16.3 | 14.2 | 7.9 | 11.3 | 0.8 | 8.3 | 4.2 | 29.6 | 15.4 |

II 目標達成状況

歯と口腔保健計画

| 指標 | 対象 | 基準値 (H27 年度) | 現状値 (R3 年度) | 目標値 (R3 年度) | 評価 |
|-------------------------|----------|-----------------|----------------|----------------|----|
| むし歯の無い人の割合 | 3 歳 | 89.3% | 91.8% | 92%以上 | ○ |
| | 年長児 | 65.9% | 80.7% | 70%以上 | ◎ |
| | 小学 3 年生※ | 92.8% | 93.1% | 95%以上 | △ |
| | 中学 1 年生 | 85.7% | 84.8% | 95%以上 | × |
| 歯肉に炎症所見を有する人の割合 | 小学 3 年生 | 1.4% | 8.8% | 1%以下 | × |
| | 中学 3 年生 | 16.5% | 2.8% | 13%以下 | ◎ |
| 給食後の歯みがきを実施している人の割合 | 小学 5 年生 | 81.0% | 44.5% | 90%以上 | × |
| | 中学 2 年生 | 12.6% | 44.5% | 15%以上 | ◎ |
| 年 1 回以上歯の健診を受けている人の割合 | 30 歳代 | 26.0% | 34.7% | 30%以上 | ◎ |
| 歯間部清掃用器具を使用している人の割合 | 成人 | 26.9% | 35.0% | 30%以上 | ◎ |
| 歯みがきを 1 日 2 回以上している人の割合 | 成人 | 58.8% | 62.8% | 65%以上 | ○ |
| 妊婦歯科健診を受ける人の割合 | 妊婦 | 12.9% | 5.2% | 20%以上 | × |
| 介護予防事業（健口体操）参加者（1 年当たり） | 65 歳以上 | 771人 | 21 人 | 900 人以上 | × |

※6 歳臼歯のむし歯なしの割合

【評価結果】

全体的に改善傾向にあり、目標を達成しているのは、年長児の「むし歯の無い人の割合」、中学 3 年生の「歯肉に炎症所見を有する人の割合」、中学 2 年生の「給食後の歯みがきを実施している人の割合」、30 歳代の「年 1 回以上歯の健診を受けている人の割合」、成人の「歯間部清掃用器具を使用している人の割合」の 5 つとなっています。一方、中学 1 年生の「むし歯の無い人の割合」、小学 3 年生の「歯肉に炎症所見を有する人の割合」、小学 5 年生の「給食後の歯みがきを実施している人の割合」、妊婦の「妊婦歯科健診を受ける人の割合」については悪化傾向にあります。妊婦歯科健診、介護予防事業については、新型コロナウイルス感染症感染予防の為に一部事業を中止とした影響が考えられます。

Ⅲ 中間評価のまとめ

(1) 実施事業

- 各健康診査（マタニティ教室、1歳6か月児健康診査、2歳児歯科健康診査、3歳児健康診査）でフロスの使用効果を啓発しました。
- マタニティ教室、離乳食教室、もぐもぐ歯っぴい教室で、身体的発達と舌、口唇の働きの関連や口腔の発達に応じた食生活についての指導を実施しました。
- 小中学校にて、歯科教室、学校保健委員会の際に、むし歯・歯肉炎と生活習慣の関係について啓発しました。
- 口腔疾患と全身疾患の関係性について広報に掲載しました。
- 民生委員を通じて65歳以上の世帯へ健口体操の啓発文書を配布しました。

(2) アンケートから見る課題と今後の方向性

- 子どものむし歯は全体的に少なくなっている傾向にありますが、中学1年生でのむし歯のない人の割合は、わずかながら減少しています。また、小学3年生で歯肉に炎症所見がみられる人の割合は、前回調査から大きく増加しています（1.4%→8.8%）。
- 年に1回以上歯科健診を受けている人は、前回調査より増加しています（29.6%→34.7%）。
- 咀嚼について、十分に噛めると回答する人の割合は、世代が上がるほど低くなる傾向にあり、青年期では90.7%となっていますが、高齢期（75歳以上）では44.2%となっています。また、「十分に噛める」の割合は世代間の減少幅が大きくなっています。
- 歯と口腔の健康と関連がある疾病・異常についていずれも知らないと回答する人は前回調査より約10ポイント減少していますが、割合は、依然として高くなっています（49.9%→40.1%）。

今後の方向性

- ➡ 全国的にも歯周病の低年齢化が問題視されている中、幼少期からの正しい歯みがきの習慣づけとともに、生活習慣を見直すことが大切です。
- ➡ 生涯にわたり歯と口腔の健康を保つことができるよう、かかりつけ歯科医を持つことを推奨し、むし歯や歯周疾患の早期発見・早期治療に対する意識向上を図る必要があります。
- ➡ 世代が上がるほど口腔機能の衰えが顕著になることから、オーラルフレイルの予防に向けてライフステージに応じた正しい口腔ケアについて周知を行う必要があります。
- ➡ 歯と口腔の健康と関連がある疾病・異常に対する認知度が低い状況にあることから、口腔の健康は全身の健康に大きく影響することを意識づけていく必要があります。

IV 後期計画における指標の設定

歯と口腔保健計画

| 指標 | 対象 | 現状値 (R3年度) | 目標値 (R8年度) | データ元 |
|---------------------------|------------|---------------|---------------|------------------|
| むし歯の無い人の割合 | 3歳 | 91.8% | 95%以上 | 地域歯科保健業務 状況報告 |
| | 年長児 | 80.7% | 95%以上 | 地域歯科保健業務 状況報告 |
| | 小学3年生 ※ | 93.1% | 95%以上★ | 地域歯科保健業務 状況報告 |
| | 中学1年生 | 84.8% | 95%以上★ | 地域歯科保健業務 状況報告 |
| 歯肉に炎症所見を有する人の割合 | 小学3年生 | 8.8% | 1%以下★ | 地域歯科保健業務 状況報告 |
| | 中学3年生 | 2.8% | 0.5%以下 | 地域歯科保健業務 状況報告 |
| 給食後の歯みがきを実施している人の割合 | 小学5年生 | 44.5% | 90%以上★ | 小学生アンケート |
| | 中学2年生 | 44.5% | 75%以上 | 中学生アンケート |
| 3歳児で不正咬合等が認められる者の割合 | 3歳 | 12.1% | 10%以下 | 地域歯科保健業務 状況報告 |
| 年1回以上歯の健診を受けている人の割合 | 30歳代 | 34.7% | 45%以上 | 市民アンケート |
| 歯間部清掃用器具を使用している人の割合 | 成人 | 35.0% | 45%以上 | 市民アンケート |
| 歯みがきを1日2回以上している人の割合 | 成人 | 62.8% | 75%以上 | 市民アンケート |
| 妊婦歯科健診を受ける人の割合 | 妊婦 | 5.2% | 20%以上★ | 地域歯科保健業務 状況報告 |
| 介護予防事業（健口体操）参加者（1年当たり） | 65歳以上 | 21人 | 90人以上★ | 地域歯科保健業務 状況報告 |
| 80歳以上（75～84歳）の咀嚼良好者の割合の増加 | 75～84歳 | 74.3% | 85%以上 | 市民アンケート |

※6歳臼歯のむし歯なしの割合

★中間評価時（令和3年度）の目標値に達していないため、中間評価の目標値を採用

【後期計画における方針】

中間評価において目標達成に至っていない指標については、中間評価時の目標値を令和8年度の目標値として再設定することとします。

年長児の「むし歯の無い人の割合」、中学3年生の「歯肉に炎症所見を有する人の割合」、「給食後の歯みがきを実施している人の割合」、成人の「歯間部清掃用器具を使用している人の割合」については目標値をすでに達成しているため、新たに目標値を設定します。「年1回以上歯の健診を受けている人の割合」についても目標値に近い値となっているため、新たに目標値を設定します。

そのほかの指標については前期計画で設定していた令和8年の目標値の達成をめざしていきます。

また、新たに追加した指標は「3歳児で不正咬合等が認められる者の割合の減少」と「80歳以上（75～84歳）の咀嚼良好者の割合の増加」となっています。「3歳児で不正咬合等が認められる者の割合の減少」については、不正咬合が、むし歯や歯周病のリスクを高め、食べる、話すなどの口腔機能の発達に悪影響を与える可能性があることを考慮し、指標として設定することとします。「80歳以上（75～84歳）の咀嚼良好者の割合の増加」については、生涯の健康や生活の質の向上に咀嚼状態を良好に保つことが重要であることを考慮し、指標として設定することとします。